

## 第2章 西トップ遺跡の石材 碑文、落書き、線刻、素描に関する初歩的な紹介

西トップ調査修復チーム 考古学研究员 Sok Keo Sovannara

### 第1節 調査の歴史

西トップ遺跡はモニュメント486として知られ、アンコール・トム内のバイヨンの南西約500mに位置する。アンコール・トムの西門から訪ねることができる。

西トップ遺跡は本来の名前ではない。長年にわたって言い伝えられてきた名前で、西にある小さな遺跡という意味である(1)。現在目にすることのできる建物は3基の砂岩製祠堂と砂岩製仏教テラス、ラテライトの圍繞石であり、これまで16世紀から17世紀で、15世紀前半にアンコール王朝が崩壊した後に属すると考えられてきた。しかし遺跡の調査で発見された中国製白磁やカンボジア製灰釉陶器の存在から、我々は中央祠堂が14世紀、東西の小祠堂はそれよりやや遅れる時期を考えている。クメールの人々はヒンドゥー教や大乘仏教から、小乗仏教とも言われる上座部仏教に改宗したとされる。カンボジアの寺院、特にアンコール・トム地域の寺院は一時的にこうした宗教変更を受け入れた。

西トップ遺跡は中央祠堂に前身遺構があることがわかっている。中央祠堂はラテライト製の前身遺構をモールドディングを施した砂岩製外装が覆っている。前身遺構は、4カ所の出入口の控柱とリンテルが、ジャヤヴァルマン5世(AD968-AD1001)期のバンテアイ・スレイに類似しているところから10世紀建立と推定される。また砂岩石材のいくつかはバンテアイ・スレイのものに非常に類似している。しかしアンリ・マルシャルが1924年に行った遺跡周辺のクリーニングによって北祠堂の北東上成基壇から碑文が発見された。この碑文には23行の文章が刻まれ、そのうち18行が判読できる(1)。碑文は多くは梵字でいくつかの行は古クメール語で刻まれ、ヤショバルマン1世の母方の叔父であるÇri-Samaravikramamという人物が、ビシュヌ像と寺院基壇を建立したことが記される。この碑文は889A.D-908A.Dのこの皇子の治世のものである。これは前身遺構の建立時期に関する問題点を提出している。この碑文によると前身遺構はこの皇子の治世(9世紀末から10世紀初頭)の建立と推定される。しかし後の砂岩祠堂に転用されている砂岩製の装飾石材を見ると、前身遺構は10世紀後半と考えざるを得ない。最終的に前身遺構が崩壊した後、14世紀から16・17世紀頃に今見る祠堂が建立されるとともに、前身遺構が砂岩の現存遺構に覆われたと考えることができる。しかしながら前身遺構と現存遺構の建立経過についての問題は大きく、今後慎重に検討されなければならない。

西トップ遺跡はフランス人研究者ラジョンキエール(1)によってMonument 486として登録されている。ただ彼は3祠堂に関しての記述でミスをしている。彼は西トップ遺跡の3祠堂がレンガ作りであると記述しているのである。西トップ遺跡は砂岩とラテライトブロックで構成されている。そのときに彼はここには碑文はないと記している。

1924年にアンリ・マルシャルはこの遺跡で全体構成を明らかにするために、土と散乱石材の除去を行った。その結果23行の碑文が中央祠堂上成基壇北東から発見され、後にフランスの研究者ルイ・フィノによって公刊された。マルシャル以後1940年代から1960年代にかけて小規模な調査が行われた。

2002年から奈良文化財研究所(日本)が、タニにおけるクメール陶器窯跡の調査の後、この遺跡の調査と修復に関する新たなプロジェクトを開始した。同じ年に地形図の作成といくつかの陶磁器の表面採集が行われた。2003年に初めての発掘調査が東テラス南側で行われた。調査区は南北11m、東西3mで東テラスとラテライト圍繞石との関係を明らかにすることが目的であった。その後、遺跡の層位と構造を明らかにするため異なった調査地での発掘調査が継続された。2011年末までに13回の考古学的調査が行われた。

2012年から奈良文化財研究所はアプサラ機構と共同で西トップ遺跡の修復作業を開始した。修復は5年間の中期計画で始められた。現在南祠堂の解体作業を続行中である。

これまでの知見によると、南祠堂とその周辺にあった散乱石材の中からは、落書き、記号、装飾の線刻を持つ石材がいくつか発見されている。こうした線刻を持つ石材のいくつかは、別の崩壊した遺跡から持ってこられた転用石材である。この線刻石材に関する予察は、西トップ遺跡の建立と石材の供給に関する調査の一環である。

### 第2節 修復作業と石材の配置

西トップ遺跡は3祠堂とテラスから構成される。我々の修復計画は5年を一単位とする10年計画である。2011年3月から開始された第一次修復工事は2017年までで、南祠堂の解体から開始した。南祠堂とその周辺のすべての石材は記録され、動かす前にあった場所によって、中央・南・北・テラス・南散乱石材・北散乱石材・西散乱石材・東散乱石材に分けられ整理された。

南祠堂の解体開始より、南祠堂から解体した石材にはSを、続いて方位のE、S、W、Nを付け具体的な場所を明示した。そして001から順次石材番号を付し、躯体部北の石材番号SN001から解体を始めた。石材は横方向にそろっており、最上層のN1から最下段のN25まで横方向の番号を付し、各石材はこれらを総合して例えばSN001/N1といった番付を用いた。

### 第3節 線刻の種類

A. 碑文 西トップ遺跡で最初に発見された碑文はアンリ・マルシャルによって 1924 年に北祠堂北東で発見された。クメール碑文一覧に登録され K.576 の番号を付され、ルイ・フィノによって 1925 年 (1) に翻訳された。全体で 23 行の梵字と末尾の 3 行は古クメール語で記され、18 行が判読できた。この碑文には紀年なかったが、ビシュヌ神像の奉納と寺院の建立は、ヤショヴァルマン 1 (889AD-908AD) の母方の叔父、Çrisamaravikrama の手になることがわかった。

2 番目の碑文は 2012 年テラスの南側の石材整理作業と基準点設置の作業中に、南側のラテライト囲繞石の内側、南のセマ石の近くで発見された。碑文は台座として装飾を加えて作られた石材の裏側に記され、年紀はなかった。碑文の文字と内容から検討すると中世、後アンコール期の碑文である。

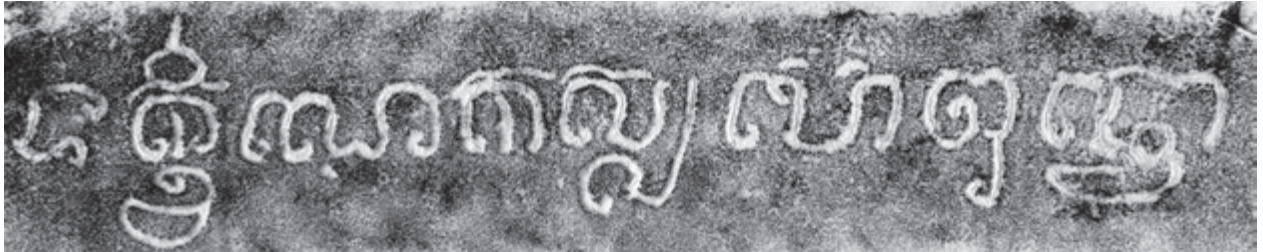


Fig.1-dakkhine kassapo buddho

Kassapo (亀) 仏は南の仏である。この台座は Kussapo と呼ばれる南を表す仏に何かを供献するための砂岩製品であると推定される。上座部仏教では四方を表す仏は Nagomano( ナーガ) , Kuksantho (雄鶏) , Kassapo and Samanakottama (雄牛) の四仏である。

最初の台座に類似した文字を刻んだ異なる 2 破片も発見した。No.3 と No.4 である。No.3 には西を表す pacca(?) の文字が刻まれる。No.4 には仏の名前を表すと思われる kyamun(?) 認められ、碑文の最後の部分だと思われる。

今回の 3 個の中世碑文の発見に基づくと、後 3 カ所に碑文を含む砂岩製石造物が設置されていたと推定できる。



Fig.2 bacca (?)

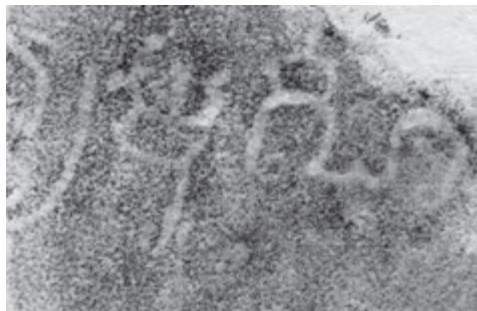


Fig.3 kyamuni(?)

### B. 線刻

線刻の類は石工たちによって記されたと考えられる。あるいは試験的に記された記号で、それ自身に意味はない。初歩的な考察ではこの線刻は南祠堂の上成と下成基壇の石材に主に発見されている。南祠堂は大きく 3 つの行程で建立されている。上成基壇は上部の 3 層 (N9, N10, N12) と下部の 5 層 (N13, N14, N15, N16 and N17)、下成基壇は 6 層 (N18, N19, N20, N21, N22 and N23) である。

いくつかの e, eka, era, ka, and ba(?) と思われる線刻は石材の側面にある。ただし意味はよくわからない。eka (Fig.2, 3,4) は梵語から来ており 1 を表す (9)。他の 1 文字の線刻は母音や子音を表し意味はないが、石工を表す記号と推定される (Fig.5, 6, 7, 8, 9,10)。反面、こうした記号の多くは子音と思われる判読できない。ただこれらの子音記号は先に紹介した中世の 3 基の台座文字と比べると、アンコール期の記号と推定される。例えば ka (Fig.11, 12,13) や ba(?) (14, 15,16) は、アンコール期のクメール子音と比較できる (10)。Fig.19 に類似したバイヨンの線刻を掲示した。



Fig.4



Fig.5



Fig.6



Fig.7

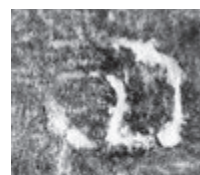


Fig.8

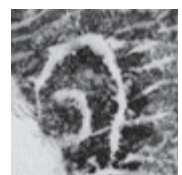


Fig.9



Fig.10

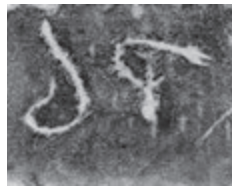


Fig.11



Fig.12

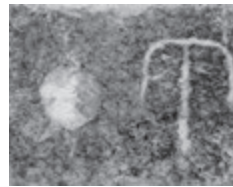


Fig.13



Fig.14



Fig.15



Fig.16

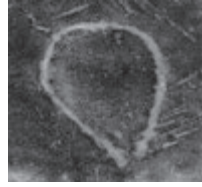


Fig.17



Fig.18



Fig.19

### C. 記号

石材には記号もある。これらの記号は採石場で切り出したときのものか、あるいは他の遺跡から転用されたときのものかさえ判明しない。いくつかの記号は装飾のある石材にある。これは西トップ遺跡の石材が崩壊した、あるいは現存するアンコール・トム内の寺院からもたらされた石材が多いということを示している。しかしどこからもたらされたのかが問題である。これら記号には意味は見受けられない。

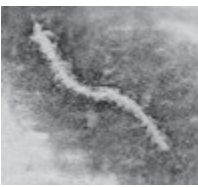


Fig.20

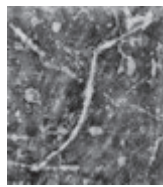


Fig.21

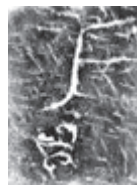


Fig.22



Fig.23

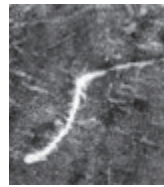


Fig.24

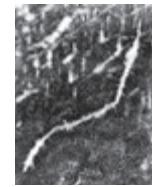


Fig.25



Fig.26



Fig.27



Fig.28



Fig.29

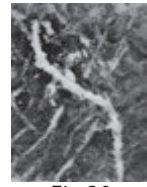


Fig.30

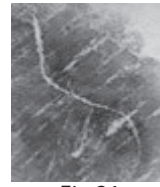


Fig.31



Fig.32



Fig.33



Fig.34



Fig.35



Fig.36

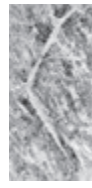


Fig.37



Fig.38



Fig.39



Fig.40



Fig.41

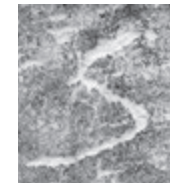


Fig.42



Fig.43

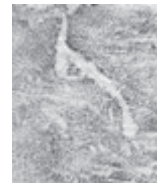


Fig.44



Fig.45



Fig.46



Fig.47



Fig.48



Fig.49



Fig.50

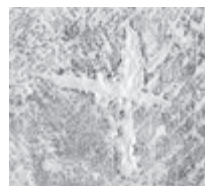


Fig.51



Fig.52

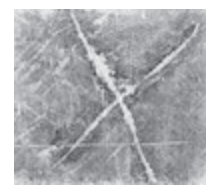


Fig.53



Fig.54



Fig.55

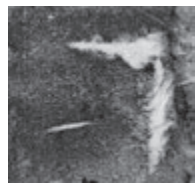


Fig.56

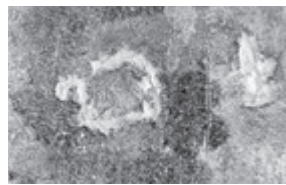


Fig.57

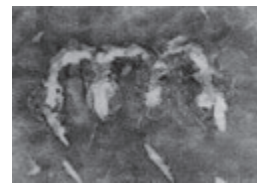


Fig.58



Fig.59

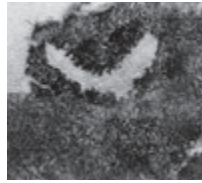


Fig.60



Fig.61

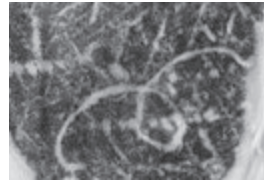


Fig.62

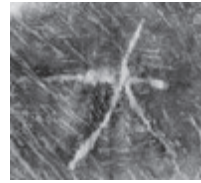


Fig.63

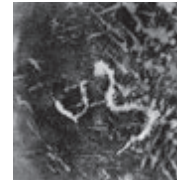


Fig.64

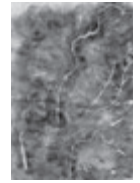


Fig.65

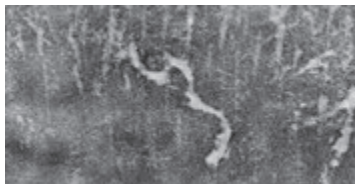


Fig.66



Fig.67



Fig.68



Fig.69



Fig.70



Fig.71



Fig.72



Fig.73

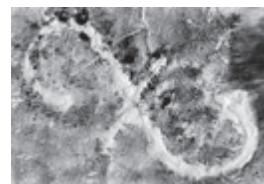


Fig.74

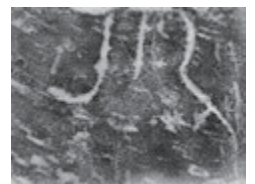


Fig.75

#### D. 装飾や素描

南祠堂からは多くの装飾石材も発見されている。また中央祠堂からは祠堂内側の装飾石材として使われたと推定される礼拝する人物像が発見された。南祠堂東出入口の北側柱の柱頭部には装飾石材が使用されており、西トップ遺跡の他の装飾石材とは異なる唐草文様である。南祠堂の上成基壇下部の石材 (SW086/N17) には5単位の唐草とその中に人物像が描かれている (Fig.76)。



Fig.76- 人物像を有する5単位の唐草文

この装飾砂岩2例は、これ以前の寺院からの転用を明示する。

この他に南祠堂の内部や入り口柱には、中世、もしくは礼拝に来た人々が記したと思われる素描が見られる。基壇の砂岩石材の側面には動物の姿が描かれる。またこうした素描は南側の散乱石材と西側の散乱石材中にも見ることができる。

こうした素描は人物や仏、動物、花・果物や不明のデザインの3種類に分類できる。人物や仏は南祠堂の東出入口の側面

で発見された。南散乱石材中にも仏を描いたいくつかの石材があった。これらの仏の素描は必ずしも上手だとは言えない。これらは礼拝のために来た人や信仰を明示したいと思う人たちが祠堂内壁に記したものであろう。しかし南祠堂建立前に記された可能性もある。例えば下成基壇の基壇側面の砂岩石材 SE01/N23 に刻まれた仏の素描は、上半身は丁寧だが、膝前から下は粗雑である。(fig.77).

動物の姿は鹿のように見える。他のいくつかは確かに象を表している。象の素描の一つは南祠堂躯体部の北内面にあり、赤い顔料で装飾される (Fig.89)。最後に花や果物の素描がある。いくつかは幾何学的模様で何かは判別できない。こうした素描の意味は判然としない。

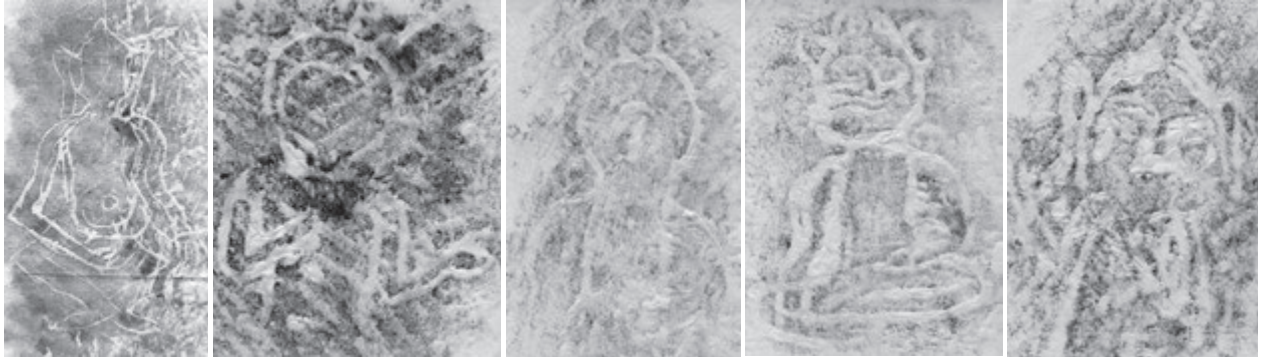


Fig.77

Fig.78

Fig.79

Fig.80

Fig.81



Fig.82

Fig.83

Fig.84

Fig.85

Fig.86

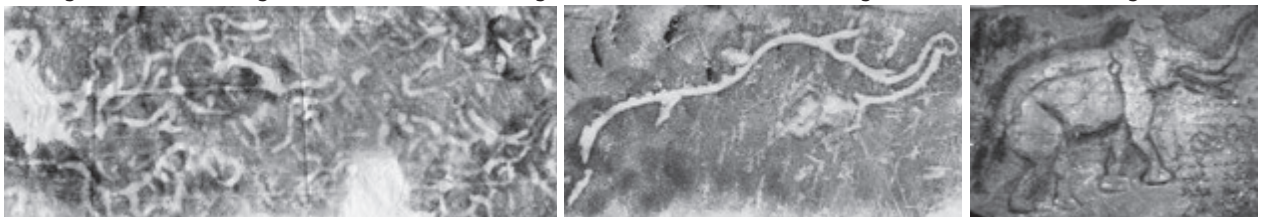


Fig.87

Fig.88

Fig.89

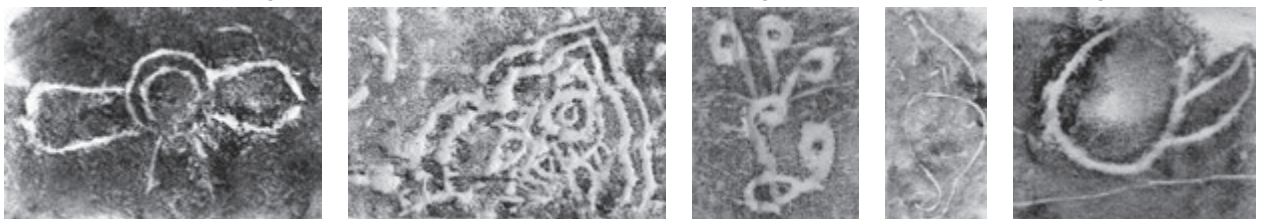


Fig.90

Fig.91

Fig.92

Fig.93

Fig.94

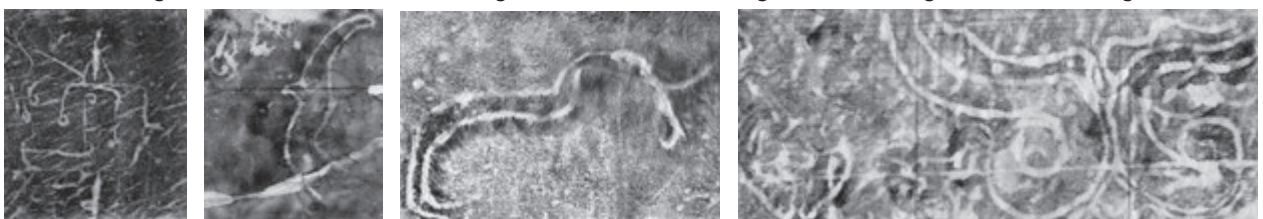


Fig.95

Fig.96

Fig.97

Fig.98

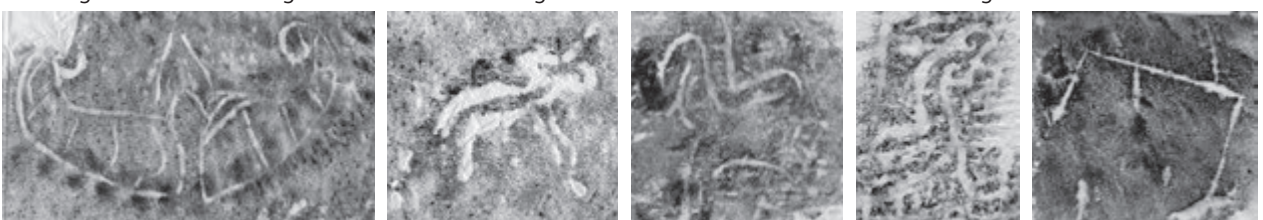


Fig.99

Fig.100

Fig.101

Fig.102

Fig.103



Fig.104



Fig.105

#### まとめと問題点

西トツプ遺跡における碑文と線刻に関するこの予察は、我々の西トツプ遺跡歴史解明の一環である。近年の調査で西トツプ遺跡には大きく2つの時期があることが明らかとなった。最初はヤシヨヴァルマン1世の母方の叔父によって9世紀に中央祠堂の前身ラテライト遺構が建立された時期である。これはアンリ・マルシャルが1924年に発見した碑文で明らかである。その次に前身遺構の崩壊の後、15世紀か16世紀に砂岩の祠堂が建立された。そのときに南北の祠堂も建立されたと推定していた。ところが最近の解体に伴う調査によって、南祠堂は中央祠堂の南階段を覆うようにして後から建立されたことが明らかとなった。

線刻や記号、装飾石材の調査はこれらの祠堂群やテラスに関するいくつかの情報を提供している。線刻や記号はそれほど多くの情報を提示していないために、重要視されてこなかった。しかし躯体部内側や基壇部で発見された装飾石材は、西トツプ遺跡で使われている石材のいくつかは、バイヨンから石材転落後に転用されていることがわかった (fig.104, fig.105 参照)。これが私の予察である。西トツプ遺跡の転用石材の出自に関してさらなる研究が必要とされている。

#### 註

- (1) Nara National Research Institute for Cultural Properties, Western Prasat Top Site Survey Report, 2012, Phnom Penh, p.14
- (2) In his brief description in *Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge*, E. LUNET DE LAJONQUIÈRE wrote that the three towers were built by brick.
- (3) Primarily, through the cultural layers of trench FA01, which was excavated in July 2007, nearby the north-west corner of the central tower, some white porcelain fragments were discovered inside the basic soil layers of basement of the laterite and sandstone basements of the central tower. According to these fragments, actually from De Fua kiln, in South-east of China, they consider the central tower is 14th century and two other towers are not so late from the construction of the central tower.
- (4) Henri Marchal, *Notes Sur Le Monument 486 D'Angkor Thom*, BEFEO, Tome XXV, Hanoi, 1925, pp411-416
- (5) Louise Finot, *Inscription d'Angkor Thom*, BEFEO, Tome XXV, Hanoi, 1925, pp 298-410.
- (6) Lunet De Lajonquière, *Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge*, Tome Troisième, Paris, 1911, p.74
- (7) APSARA Authority, Department of Culture, *Report of Excavation Work at Western Top Temple*, Siem Reap, 2003, page 1. (written in Khmer)
- (8) Louise Finot, *Inscription d'Angkor Thom*, BEFEO, Tome XXV, Hanoi, 1925, pp 307-309
- (9) Gérard Huet, *Dictionnaire Sanskrit-Français*, 2005, p.78
- (10) Savaros Pou, *An Old Khmer-French-English Dictionary*, Cedoreck, Paris, 1992, pXIX